

思い出す、忘れる、生きる

——ゼーガース『死んだ少女たちの遠足』における記憶のあり方

中丸 禎子

I 序

アンナ・ゼーガースは、1900年、ユダヤ人としてマインツに生まれた。26年頃から執筆を始め、28年に共産党に入党し、33年、ヒトラーの政権奪取のためフランスへ、41年にはメキシコへ亡命した。メキシコで、ゼーガースは母の死とマインツ空襲の報を受け、自身は交通事故で重傷を負った。『死んだ少女たちの遠足』は、43年、その回復期に書かれたもので、唯一の自伝的な小説として、ゼーガース自身が本名のネティという名で登場する。ヨーロッパからメキシコへ亡命してきた主人公が病氣にかかり、数か月後に完全には回復しないままに外に出る場面から物語は始まる。昔、ライン河畔での遠足で見たのと似た紋章を見たことがきっかけとなって、主人公は第一次大戦以前のライン河畔にいる。そして、ネティと呼ばれたことで自分もお下げの女学生となって、級友と遠足を楽しむ。日の光の中で一緒に遠足を楽しんでいる少女たちの多くは、1943年の時点ですでに死者である。主人公は、その時代まで生き延びてきたゼーガースとしては、そのことを知っており、そのことを知らずに遠足を楽しむ少女たちを見ながら、彼女たちのその後の運命に思いをはせる。一方で主人公は、そのことをまだ知らないネティとしては、少女たちとともに遠足を楽しみ、教師にこの遠足のことを作文に書くよう命じられる。再び1943年のメキシコに戻った主人公が、この宿題をやらうと決意する所で話は終わる。

この作品はただ、少女時代の遠足と、一緒にその遠足に行った少女たちのその後の運命について知るところを書いただけの個人的な作品であり、他の作品のように政治的なメッセージを強く打ち出すことはない。だが、この作品において、主人公の記憶は、主人公が現実に対して、死者に対して、歴史に対して誠実であろうとするがゆえに、さまざまなあり方をする。ここでは、そのさまざまな記憶のあり方について考えてみたい。

II 記憶のあり方

① 思い出す

この作品は、「遠足についての作文」として書かれている。この作品に登場するのは「死んだ少女たち」であり、これを書くよう命じたのは、ユダヤ人としてポーランドに追放され、おそらくはもう死んでしまった教師、フロイライン・ジッヘルである。この物語を書くこと、戦争犠牲者のことを「思い出し」「記録する」ことは、犠牲者から出された課題なのである。

犠牲者から出された課題として「思い出す」ということは、戦後ドイツにおいて、何よりもまず政治的・思想的な場において広く行われてきた。ユダヤ人をはじめとする被害者

の側から出された「忘れるな」という課題が、戦後アメリカにおけるユダヤ人の経済力や、国際社会における東西ドイツの立場といった背景もあって、加害者としてのドイツ人にも受け入れられてきたのである。右翼団体による差別は根強く、また、通り一遍の記憶のあり方に対する批判もありはするが、それでも、一般的にドイツでは、「思い出す」ということが、政治的・思想的に無視出来ない意味を持っていると言ってよい。では、なぜ「思い出す」ことが犠牲者から出された課題なのだろうか。

およそホロコーストというものは、ひとつの民族を根絶やしにし、その存在そのものを、その民族が存在したという記憶も含めて完全に消し去ることを目的としていた。同胞をナチスに殺され、自らは命を永らえたユダヤ人も、ヒトラーのデマゴグに流されるままにナチズムを信奉したドイツ人も、あるいは反ナチスとして戦ったドイツ人も、ナチスに反対した作家たちも、誰も、ホロコーストを止めることが出来なかった。ホロコーストを止めるだけの軍事力を持たず、従って犠牲者の生命を守れなかった者が、ホロコーストの後で出来ることは、犠牲者の記憶を守ることだけだった。加害者としてあまりに大きな罪を犯したドイツ人・ナチスは、被害者の「忘れるな」という課題を受け止めるという形でしか最低限の責任を取ることが出来ず、被害者もまた、自分たちが受けてきた苦しみ、死んだ同胞が受けた苦痛を「忘れるな」と要求することでしか、加害者に対して責任を問うことが出来なかったのである。

政治的・思想的な被害・加害の関係にたつて死者の記憶を守ること、「思い出す」こと、「忘れない」ことは、政治的・思想的な観点からドイツ人・ナチスを批判することである。すなわち、政治的被害者であるユダヤ人が「思い出す」とは政治的加害者であるドイツ人の罪を問うことであり、ドイツ人が「思い出す」とは、自らの政治的罪を問うことである。思想的被害者である反ナチスと、思想的加害者であるナチスが「思い出す」ことについても同様のことが言える。

だが、『死んだ少女たちの遠足』は、ドイツ人やナチスの罪を問うために書かれた物語ではない。ゼーガースはユダヤ人の共産主義者であり、政治的・思想的には誰に対しても責任を負うことのない完全な被害者として、加害者に責任を問う権利を持っている。しかし、ゼーガースはこの作品においてはそれをしない。第一次世界大戦前には仲良くしていた少女たちが様々な形で戦争と関わり、敵味方に分かれたということは随所で語られるが、その場合にも、加害側の少女たちへの批判に主眼があるというわけではない。このことは、「思い出す」ということが、被害者にとっては加害者の責任を問うためののみ行われるのではないということを示している。被害者は、被害者として加害者に対して「忘れるな」と要求する権利を満すためにだけ、「思い出そう」とするのではない。被害者にとって「思い出す」ことは権利であると同時に義務であり、加害者に対する「忘れるな」という要求は、同時に、自分自身に対する「忘れまい」という意志なのである。『死んだ少女たちの遠足』において「忘れまい」という意志を引き起こすもの、ゼーガースがこの作品を書くこ

とを強いるものは、何だろうか。

それは、直接的にはフロイライン・ジッヒェルであり、もう少し広く言えば、この作品に登場する「死んだ少女たち」である。もしも彼らに対してゼーガースが責任を負っているとすれば、つまり、主人公が死者から出された課題を「やらなくてはならない」という理由があるとすれば、それは、ゼーガースが「生き残ってしまった」ということである。殺戮を本質とする戦争においては、ナチスも連合国も等しく人の存在、すなわち人の生命と記憶を消し去ることを目的としている。従って、戦争においては、ドイツ人とユダヤ人という政治的な区分、ナチスと反ナチスという思想的な区分とはまた別に、生き残った者と死んだ者という決定的な区分が生じる。その時代を生き延びた者は、たとえ家族や友人を奪われ命からがら逃げ出した者であったとしても、死んだ者に対して彼らの記憶を守る責任を負うことになる。犠牲者たちは語ることが出来ない以上、彼らがどのように生き、どのように殺されたかを記憶し、伝えることが出来るのは生き残った者だけだからである。これはいわば、「生き残ってしまった責任」である。ゼーガースは、犠牲者に対して「生き残ってしまった責任」を負い、その責任においてこの物語を書いているのである。では、「生き残ってしまった」者が、犠牲者に対して、「生き残ってしまった責任」を取るために「思い出す」時、彼らは何を「思い出す」というのだろうか。

それは、彼女たちの悲惨な死であり、その悲惨さを際立たせるために常に死と並べられる幸福な生である。例えばネティの親友の一人マリアンネは、次のように書かれる。

レーニとマリアンネは腕を組んでライン通りを歩いて行った。マリアンネは今も赤いカーネーションを一本、くわえていた。彼女は同じカーネーションをレーニのお下げにも差していた。わたしは今になっても、いつもマリアンネを、口にくわえた赤いカーネーションと共に思い浮かべる。たとえ彼女がレーニの隣人たちに悪意のある言葉を投げ返し、半分焼け焦げた体で、煙をあげる服の切端をまとめて家の灰の中に横たわっているとしても、消防隊も、マリアンネを助けるには遅すぎた。家々を直撃した砲撃の炎がライン通りにまで広がった時、彼女はちょうど両親の所にお客に来ていたのだった。彼女は、彼女が友人であることを否定し、飢えと様々な病気で強制収容所で死んだレーニよりも楽な死を迎えたのではなかった。¹

¹ Seghers, Anna: Der Ausflug der toten Mädchen. In: Ausgewählte Erzählungen, 2. Aufl. Darmstadt und Neuwied (Herman Luchterhand Verlag GmbH & Co KG) 1984, S.141ff. Leni und Marianne gingen eingehängt auf die Rheinstraße. Marianne hatte noch immer eine rote Nelke zwischen den Zähnen. Sie hatte die gleiche Nelke in das Band von Lenis Mozartzopf gesteckt. Ich sehe Marianne immer weiter mit ihrer roten Nelke zwischen den Zähnen, auch wie sie den Nachbarinnen der Leni böartige Antworten gibt, auch wie sie mit halbverkohltem Körper, in rauchenden Kleiderfetzen in der Asche ihres Elternhauses liegt. Denn die Feuerwehr kam zu spät, um Marianne zu retten, als das Feuer des Bombardements von den unmittelbar getroffenen Häusern auf die Rheinstraße übergriff, wo sie gerade bei

これは、連れ立って遠足から帰る場面だが、マリアンネがレーニと一緒にシーソーに乗る場面では、マリアンネがナチスの高官と結婚し、反ナチス活動をして夫と共に逮捕されたレーニへの助力を拒むということが、同じ喫茶店に遠足に来た男子クラスがネティ達の女子クラスと鉢合わせる場面では、マリアンネの最初の婚約者が第一次世界大戦で戦死したということが語られる。

戦時下の犠牲者を、生者の責任において「思い出す」という行為においては、「思い出さ」れることのすべては彼女たちの悲惨な死へと収斂していく。なぜなら、そのような死に方をする中で彼女たちは死の尊厳を奪われ、死の尊厳を失うことで生の尊厳をも奪われたのであり、そのことが生き残った者が彼女たちを「思い出さ」なくてはならない最大の理由だからである。ここにおいて犠牲者の生を「思い出す」ことはすなわち彼らの死を「思い出す」ことであり、犠牲者の幸せな時代を「思い出す」ことはすなわち彼らの苦しみに満ちた時代を「思い出す」ことである。「思い出す」とは、平和な時代に、犠牲者たちが楽しく学校へ行き、女学生らしい恋愛をし、やがて幸せな結婚をし、穏やかに暮らしていたということを「思い出す」のだが、それと同時に、常に、その人々が、協力するという形、拒むという形、疑問を感じつつ従うという形、無関心という形、それぞれの形で戦争と関わり、巻き込まれることで、罪ある者も罪なき者も苦しんで死んでいったということを「思い出す」のである。

死の悲惨さと同時に、幸せな日常、平和な生を「思い出す」ことは、死の悲惨をいっそう耐えがたく、許しがたいものにする。女学生時代が幸せで、遠足が楽しかったが故に、その幸せを打ち砕いた悲惨な死は、よりいっそう際立つことになる。

この思い出し方は、生き残った者に苦痛を与える思い出し方である。苦痛は、この作品では主人公の病気という形で現れている。この作品を書いた時、作者は交通事故で重傷を負っていた。病気であれ、交通事故であれ、ゼーガースの身体的苦痛は、根源的には、死者たちを後に残してメキシコにたどり着き、彼女たちの悲惨な死と無念のうちに終わった生を引き受けて生きるということ、そのために、常に彼女たちの悲惨な死の記憶にさらされるということから生じる心的苦痛に由来するものである。犠牲者たちの悲惨な死を記憶し伝えていくこと、それだけでなく、本来ならばただ楽しいだけの思い出であるはずの女学生時代の生の記憶をも、やはり後の死へと巻き込まれていくものとしてのみ「思い出し」伝えていくことに伴う苦痛は、主人公が「生き残った者」である以上、逃れることの出来ない、逃れてはならない苦痛である。犠牲者に対して責任を取るということは、どんなに「思い出す」ことが苦痛であっても、それに耐え、それでもなお、「思い出す」とい

ihren Eltern zu Gast war. Sie hatte keinen leichteren Tod als die von ihr verleugnete Leni, die von Hunger und Krankheiten im Konzentrationslager abstarb.

うことなのである。

戦後半世紀を経た今、「思い出す」ことの中に、一連の商業主義や、定番化された表現によるマンネリズムがあるということは否定出来ない。しかし、「思い出す」ということは、根源的には責任を取るということであり、このことから生じる苦痛にもかかわらず、生き残った被害者たちは半世紀間「思い出し」続けてきた。通常であれば時の流れに従って遠い過去になっていくことを、生き残った者たちは苦痛に耐えることでいつまでも切実な現在たらしめようとしてきた。そのことが成功したとしても失敗したとしても、どのような弊害を生んだとしても、それを支えてきたのは、その責任に対する意志であり、犠牲者に対する良心である。このことを確認した上で、「思い出す」ことが死者に対して責任をとる唯一絶対の道なのかということ、そしてこの作品の中で主人公がしているのは「思い出す」ことだけなのかということを考えてみたい。

②忘れる

『死んだ少女たちの遠足』の中で語られる「記憶」には、少なからず、「忘却」の要素がある。

マールブルクの大聖堂にある中世の石のマリア像のように高貴で整った彼女の顔立ちには、快活さと優美以外の何もも見られなかった。一輪の花と同じように、薄情さや罪過、良心の冷たさの印も、彼女には見られなかった。わたし自身は彼女について知っていることをすぐに全て忘れてしまい、彼女を見るのが楽しかった。²

戦争の後で生き残った者がしようとするのは二つある。ひとつは「思い出す」ことであり、もうひとつは「忘れる」ことだ。理不尽に殺された犠牲者を記憶に留めることでそのような理不尽と戦おうとするのは極めて自然な反応だが、全てを忘れて一日も早く日常生活に戻ろうとするのも、また当然の反応である。実際に、「つらいことは忘れたい」と、口を閉ざしてきた生き残りは大勢いる。だが、「思い出す」ことが常にその勇気と正しさを褒め称えられてきたのに対して、「忘れる」方は、歴史に対する責任の放棄として、程度の低いセンチメンタリズムとして、しばしば批判され、あるいは無視されてきた。「忘れる」主体はあくまで被害者であり、自分自身も辛い経験をしてきたということから、このような態度に一定の理解や共感が示されることもあるが、その場合にも、「被害者の立場と感情

² Ebenda. S.124ff.

In ihrem Gesicht, so edel und regelmäßig geschnitten wie die Gesichter der steinernen Mädchenfiguren aus dem Mittelalter im Dom von Marburg, war nichts zu sehen als Heiterkeit und Anmut. Man sah ihr ebensowenig wie einer Blume Zeichen von Herzlosigkeit an, von Verschulden oder Gewissenskalte. Ich selbst vergaß sofort alles, was ich über sie wußte, und freute mich ihres Anblicks.

を考慮すれば、仕方がない」という、消極的な理解や共感しか示されなかった。

しかし、「語る」ことは「口を閉ざす」ことより絶対的に勇気があり、「思い出す」ことは「忘れる」ことよりも絶対的に正しいのだろうか。

戦争の「犠牲者」ではない「死者」は、死んだ時には嘆かれても、時が経つと忘れられていく。遺族は、「死者」の死の直後には、たえず「死者」のことを歎き、悼み、そしておそらく「忘れまい」と思うだろう。それでも、時がたれば「死者」は忘れられていき、やがて時々思い出されるだけの存在になる。そして、その時には、悲しみの底にある悲惨な「死の犠牲者」としてではなく、かつて共に喜びに満ちた生を送った「死者」として思い出される。これが、本来あるべき「死者」の姿である。しかし、戦争の「犠牲者」は、その死があまりにも悲惨であるが故に、片時も、忘れられることが許されない。しかも、この時「思い出す」れるのは、ともすれば生々しいだけの死の記憶である。生々しい彼らの死体は、死者としての尊厳を一度も主張することなくカメラに取められ、文章に書かれ、絵に描かれて記憶されてきた。そして、死後半世紀を経た今でも、依然として「悲惨な犠牲者」として変わらぬ生々しさをもってメディアの中に現れ続け、「あの悲惨を繰り返さない」ための教訓として生き続け、反戦のためのスローガンであり続けなくてはならない。この、遺族に、そしておそらく犠牲者自身にも苦痛を強いるあり方を支えてきたのが、「犠牲者」に対して「生き残ってしまった責任」を取ろうとする意志と良心であるとしても、同時に、この生々しいだけのあり方が、「犠牲者」を「悲惨な戦争を忘れない」ためのただの手段へと貶め、安らかで尊厳ある「死者」にすることを阻んできたということも、事実である。そしてこのあり方は、生の時代の幸せをも、後の死の酷さを引き立てるためにだけ利用してきた。このあり方は、「犠牲者」の死から尊厳を奪ってきただけでなく、生からも尊厳を奪ってきたのである。このことを考える時、「犠牲者」の死と生を反戦という政治的・思想的主張の手段にしないために、「犠牲者」が生と死の尊厳を取り戻すために、「忘れる」という選択肢があってもいいのではないだろうか。

もちろん、このような議論は、生き残った被害者が死んだ被害者である犠牲者のことを「忘れる」場合についてのみ成り立つ。ただし、ここでいう「被害者」は、政治的・思想的には被害者であるとは限らない。というのは、戦争、特に第二次世界大戦のような総力戦では、非戦闘員を含む全ての人間が、攻撃される立場に置かれ得るのであり、政治的・思想的立場にかかわらず被害者になり得るからである。戦争が引き起こす死においては、死んだ者は全て戦争が引き起こす死の犠牲者という意味において被害者であり、生き残った者も戦争によって友人や家族を失った者という意味において被害者である。そしてその意味でのみ、政治的・思想的加害者も、戦争の犠牲者として論じられ得る。マリアンネは、ドイツ人でありナチスであるという点で加害者だが、空襲の犠牲者としては被害者である。気を付けなくてはならないのは、マリアンネは空襲の犠牲者という意味でのみ、戦争の被害者なのであって、そのことによって、彼女の政治的・思想的加害者としての責任がなく

なるわけではないということだ。「忘れる」ということに関して論じられ得るのは、生き残った「被害者」が、死んだ「被害者」のことを「忘れ」ても良いか、ということだけである。「空襲を生き延びたマリアンネ」がいたとしたら、そのマリアンネが、空襲の恐怖と空襲で失った家族を「忘れる」という選択肢はあり得るが、彼女が、ドイツ人として、ナチスとして、ユダヤ人や反ナチスの虐殺に手を貸したことを忘れるという選択肢はあり得ない。政治的・思想的加害者は、自らなした加害についてきちんと「思い出し」、語り、裁きと罰を受けるという形であれ、謝罪するという形であれ、何らかの形で被害者に対して責任を取らなければならない。戦時下の自らの加害の記憶が、いかにつらいものであろうと、加害者は加害者である以上、それを忘れる権利はない。『死んだ少女たちの遠足』において、忘却の可能性が論じられ得るのは、「思い出す」主体である主人公が戦争の「被害者」であり、「思い出す」内容が戦争の犠牲者についての記憶だからである。

この作品において、級友たちの死がどのような死であったのか、1943年までを生きた主人公は、彼女たちの生を見ながら思い返している。だがこのことは同時に、ライン河畔に遠足に来ている主人公が、1943年を含む戦時中の、死の時代の只中にあるのではなく、あくまで大戦前の生の時代にいることを示している。今、主人公の目の前にあるのは、級友たちの生であって、死ではない。たとえば、ネティのもう一人の親友レーニが初めて出てくる場面は、次のようなものである。

レーニは、角張ったボタン留めの靴をはいた大きな足を、力強く突っ張った。わたしは彼女が、いつも兄の靴をもらっていることを思い出した。もともと、その兄は、1914年の秋、第一次世界大戦で死んでいた。わたしは同時に、どうして、レーニの顔に、彼女の生涯を台無しにした残酷な事件の跡が全く見られないのか、不思議に思った。彼女の顔は新鮮なりんごの顔につややかで、ぴかぴか光っていた。ゲシュタポが彼女を逮捕し、彼女が夫について供述するのを拒んだ時につけた、ほんの小さな名残、ほんの小さな殴打の痕もなかった。彼女のお下げは、シーソーがゆれると首筋から離れた。彼女は丸い顔に濃いまゆをひそめて、小さいころからあらゆる難しい試みで受け入れてきた、きっぱりとした、ある種の決断を秘めた表情をしていた。普段は鏡のようになめらかで丸い、彼女のりんごのような顔に、あらゆる機会、分の悪い球技や競泳や作文、後には決起集会やピラ配りの時にできる額のしわを、わたしは知っていた。わたしが、彼女のまゆの間のこのしわを最後に見たのは、ヒトラーの時代、最終的な逃亡の少し前に、生まれ故郷の町に最後に友人たちを訪ねた時のことだった。かつて、彼女の夫がナチスに禁止された印刷所で逮捕され、約束の時間に約束の場所に来なかった時にも、彼女の額にこのしわが刻まれたのだった。彼女自身もすぐに逮捕されたが、その時も彼女はきつと、まゆと口をゆがめていたはずだった。かつては

特別な時にだけ浮かんだ彼女の額のしわは、この戦争の二度目の冬に、彼女が女子強制収容所でゆっくりと、しかし確実に飢えて死んだ時、ひとつの消えない特徴になった。わたしは、彼女が殺された時、しわを刻んだ額をしたりんごのような顔をしていたに違いないと確信してさえたのに、どうして、お下げに太いリボン巻いた彼女の顔を時折忘れることが出来るのか、不思議に思った。³

二人について人がわたしに語り、書いたことの全てが、今は、ありえないことのように思えた。⁴

これらの場面では、遠足の風景は地の文と同じ過去形で、戦時中の逮捕と死、誰かがそれらのことについて書き、語ったということは、過去完了形で書かれている。主人公にとっては、遠足という時間が「現在」として目の前にあり、本来は遠足よりも後、1943年に近いところにあるはずのナチズムの時代が遠足の時間よりも遠い場所にあるのである。

主人公がレーニについて知っていることのうち、最も生々しいのは、レーニが反ナチス活動の末にマリアンネに見捨てられて子どもを失い、収容所で死んだということであり、

³ Ebenda. S.124

Leni stemmte sich kräftig mit ihren großen Füßen ab, die in eckigen Knopfschuhen steckten. Mir fiel ein, daß sie immer die Schuhe eines älteren Bruders erbe. Der Bruder war freilich schon im Herbst 1914 im ersten Weltkrieg gefallen. Ich wunderte mich zugleich, wieso man Lenis Gesicht gar keine Spur von den grimmigen Vorfällen anmerkte, die ihr Leben verdorben hatten. Ihr Gesicht war so glatt und blank wie ein frischer Apfel, und nicht der geringste Rest war darin, nicht die geringste Narbe von den Schlägen, die ihr die Gestapo bei der Verhaftung versetzt hatte, als sie sich weigerte, über ihren Mann auszusagen. Ihr dicker Mozartopf stand beim Schaukeln stark vom Nacken ab. Sie hatte mit zusammengezogenen dichten Brauen in ihrem runden Gesicht den entschlossenen, etwas energischen Ausdruck, den sie von klein auf bei allen schwierigen Unternehmungen annahm. Ich kannte die Falte in ihrer Stirn, in ihrem sonst spiegelglatten und runden Apfelgesicht, von allen Gelegenheiten, von schwierigen Ballspielen und Wettschwimmen und Klassenaufsätzen und später auch bei erregten Versammlungen und beim Flugblätterverteilen. Ich hatte dieselbe Falte zwischen ihren Brauen zuletzt gesehen, als ich zu Hitlers Zeit, kurz vor der endgültigen Flucht, in meiner Vaterstadt meine Freunde zum letztenmal traf. Sie hatte sie früher auch in der Stirn gehabt, als ihr Mann zur vereinbarten Zeit nicht an den vereinbarten Ort kam, woraus sich ergab, daß er in der von den Nazis verbotenen Druckerei verhaftet worden war. Sie hatte auch sicher Brauen und Mund verzogen, als man sie gleich darauf selbst verhaftete. Die Falte in ihrer Stirn, die früher nur bei besonderen Gelegenheiten entstand, wurde zu einem ständigen Merkmal, als man sie im Frauenkonzentrationslager im zweiten Winter dieses Krieges langsam, aber sicher an Hunger zugrunde gehen ließ. Ich wunderte mich, wieso ich ihren Kopf, der durch das breite Band um den Mozartopf beschattet war, bisweilen vergessen konnte, wo ich doch sicher war, daß sie selbst im Tod ihr Apfelgesicht mit der eingekerbten Stirn behalten hatte.

⁴ Ebenda. S.125.

Mir kam jetzt alles unmöglich vor, was man mir über die beiden erzählt und geschrieben hatte.

あるいはグシュタボに逮捕されて顔に一生残る傷を付けられたということである。だがここで、レーニは後に自分を裏切ることになるマリアンネと一緒に「りんごのような顔」をしてシーソーに乗って遊んでいる。この物語の登場人物は、「死んだ少女たち」であるはずなのに、主人公の前に立ち現れてくるのは、彼女たちの生きた姿である。主人公がどんなに意識的に彼女たちの聞き知った死を「思い出そう」としても、彼女たちの生は現にそこにある。主人公が帰る町並みが爆撃で壊滅したことを主人公は知っているのに、家々も、階段も、噴水も、街の人々も、第一次世界大戦以前の姿でそこにある。後に戦争と結びつくことで死んでいく者、壊れていく物が、この遠足の記憶においては戦争と結びつかない生きた姿で現れるのであり、それらが死んでいき、壊れていくということは、一時的であれ「忘れ」られている。

ここで主人公がレーニに対してしなくてはならないと思っているのはあくまで彼女の逮捕と死を「記憶し」、伝えることであり、1943年の今も続く沢山のレーニたちの逮捕と死を止めることである。これは、とりもなおさず、共産主義作家アンナ・ゼーガースが共産主義的な作品を書き、ペンを以てファシストの権力と戦うということである。だが、このことはたとえば病氣という形をとって主人公に苦痛を与えただけでなく、犠牲者から死者としての尊厳を奪って来た。レーニの死には彼女の死から尊厳を奪ったものであり、だからこそそれは「記憶され」ねばならないのだが、一方で、そのような姿でありつづける限り、彼女は尊厳ある死者になることは出来ないのである。しかも、主人公はレーニが死ぬ現場には居合わせていない。それにもかかわらず、アンナ・ゼーガースとしての主人公がこれまで努力して「記憶し」ようとしてきたのは、彼女の死だったのである。ゼーガースが、戦争を終わらせ苦しみを終わらせるために良心的な努力をして保とうとしてきたのは、レーニの死から尊厳を奪った彼女の死の記憶であり、しかもそれはネティとしての自分が直接知っている生きた記憶ではなく、「反ナチス活動の末の衰弱死」という、誰かによって伝えられ、半ば定番化された「作られた記憶」だったのである。主人公がレーニの死を「忘れる」ということは、この作られた記憶を否定するということであり、そのような記憶の中では「犠牲者」でしかなかったレーニに、死者としての尊厳を取り戻させるということである。

犠牲者の死があまりに悲惨で生々しく、人間の死としての尊厳を欠いていたが故に、ゼーガースはその悲惨で生々しい死を忘れまいとし、生き残った者としての苦痛に耐えようとした。だが、その苦痛が主人公の病気の根源的な原因であるとするれば、主人公は悲惨な死の記憶を手放し、その苦痛から解放されることでしか、回復することは出来ない。そして、死の尊厳を奪われた「犠牲者」のために保とうとしてきた尊厳のない死の記憶を、生き残った者が手放すこと、死んだ者の「犠牲者」としての姿を「忘れる」ことによってしか、「犠牲者」もまた尊厳ある「死者」として解放されることは出来ない。「思い出す」主体としての主人公が、「犠牲者」が犠牲になることで受けた傷から回復しなければ、「思

い出される」対象としての「犠牲になった少女たち」は、「死んだ少女たち」にはなれないのである。

このようにして「忘れ」られるということは、必ずしも死者の意向にそむくことではない。次に引用するのは、作文を書くよう命じたフロイライン・ジッヒェルの「犠牲者」ではなく「死者」としての姿にネティが気付くという場面である。

わたしは彼女 [フロイライン・ジッヒェル] のすぐ隣りに座っていて、突然、わたしの記憶の中に重大な怠慢があったような気がした。まるでわたしが、ごく小さなことながらも、いつまでも記憶に留めておくという高尚な義務を負っているのに、それをしなかったかのようなようだった。フロイライン・ジッヒェルの髪は昔から記憶の中にあるような真っ白な髪だったのでなく、わたしたちが学校の遠足に行った時には、こめかみのところの白い巻き毛以外はくすんだ茶色だった。こめかみの巻き毛にも、数えられるほどしか白髪はなかったが、それらは、まるでわたしが今日、ここで、はじめて老いの跡をつきとめたかのように、わたしを狼狽させた。⁵

主人公は、「思い出そう」とする時、フロイライン・ジッヒェルの宿題を、犠牲者フロイライン・ジッヒェルから生き残ったアンナ・ゼーガースに出された課題として受け取っていた。しかし、フロイライン・ジッヒェルはホロコーストという歴史の中の犠牲者である以前に、ネティと一緒に遠足という時間を共有した、ネティの記憶の中の教師である。「遠足について書く」ということは、本来、生者フロイライン・ジッヒェルが女学生ネティに課した宿題であり、ネティが本当にしなくてはならないのは、ゼーガースの記憶ではなく、ネティ自身の遠足についての記憶を書き留めることである。レーニのりんごのような顔や、フロイライン・ジッヒェルの茶色い髪は、傷だらけの顔と比較されるためにではなく、白髪のいたましさを引き立てるためにではなく、生者フロイライン・ジッヒェルの課題を果たすために思いだされなくてはならない。そして、その課題がきちんと果たされるためには、死も、傷だらけの顔も、白髪も、一時的であれ、「忘れ」られなくてはならない。なぜなら、犠牲者の姿はあまりに圧倒的であるがゆえに、それと並列される他の全ての記憶は、色あせ、それ自体としての価値を失うからである。

死の生々しさを「忘れる」こと、口当たりのいい、幸せなことだけを思い出すが歴

⁵ Ebenda. S.128.

Mich selbst durchfuhr plötzlich, da ich dicht neben ihr saß, wie ein schweres Versäumnis in meinem Gedächtnis, als ob ich die höhere Pflicht hätte, mir auch die winzigsten Einzelheiten für immer zu merken, daß das Haar von Fräulein Sichel keineswegs von jeher schneeweiß war, wie ich es in Erinnerung hatte, sondern in der Zeit unseres Schuhlausfluges düftig braun, bis auf ein Paar weiße Strähnen an ihren Schläfen. Es waren ihrer jetzt noch so wenig weiße, daß man sie zählen konnte, doch mich bestürzten sie, als sei ich zum erstenmal heute und

史に対する責任の放棄であり、センチメンタリズムであるということは否定出来ない。だが、死の悲惨さを「忘れる」こと、そのことによって「生き残った者」が回復することは、死者の尊厳を取り戻すためにどうしても必要なことであり、死者に対して責任を取る、もうひとつの方法なのである。

③生きる

しかし、戦争で死んだ犠牲者たちの死は、その他の死に比べてあまりに悲惨な死である。生き残った者がどのような思い出方をしようとも、あるいは忘れ方をしようとも、彼女たちの死に尊厳がなかったという事実は変えられない。それでもなお、悲惨な死を忘れ、その死と関係のないところにある生を思い出すことは必要である。なぜなら、戦争の犠牲者ではない死者が生きて死のために生きたのではないのと同じように、戦争の犠牲者も酷く殺されるためにだけ生きたのではないからである。酷く殺されるためだけにあったのではない幸福な生は、不幸な死の引き立て役としてではなく、幸福な生それ自体として思い出されなくてはならない。もちろん、どんなに尊厳ある生を思い出しても、尊厳のない死という事実を変えすることは出来ない。ただ、死だけが強調され繰り返し思い出される中でそれ自体の記憶としての価値を失い、その終末としての死に尊厳がなかったがゆえにそれ全体が尊厳をなくしてしまったかに見える生に、尊厳があったという事実を確認することが出来るだけである。そして、ただそれだけのことが、生き残った者が回復し、これからも生きていくために必要なのである。

このことは、結局のところ、生者にとって必要不可欠であるという、ただそれだけのことである。「思い出す」ことの先には、歴史に対して責任を取ることを、人間が人間として尊厳を持って生きてはいけないうような歴史を変えていくということがある。これに対して、「忘れる」ことは、犠牲者たちの死に対して何の歴史的解決ももたらさない、生き残った者の平安のためにだけ行われるセンチメンタリズムである。死者の尊厳や「もう一つの責任」を引き合いに出して彼女たちの死を「忘れる」ことの正当性をどんなに主張してみても、それは、あくまで記憶の中の死者が尊厳を取り戻すための正当性であり、犠牲者の死に尊厳がなかったという事実の前では無力である。

生き残った者がその事実を前にしてなお、「忘れる」ことの正当性を信じて「生き残った者としての責任」を放棄し、彼女たちの悲惨な死を「忘れる」意志を持つことはないだろう。まして、この作品で「忘れる」主体である主人公は、ユダヤ人の反ナチス作家であるが故に亡命を余儀なくされ、メキシコにおいても「ハインリヒ・ハイネ・クラブ」や「自由ドイツ」のメンバーとして対ヒトラーの文筆活動を続けてきたアンナ・ゼーガースである。ゼーガースは、「忘れる」ことで苦痛と病気から解放されるとわかっていたとしても、

hier auf eine Spur des Alters gestoßen.

そのために歴史に対する責任を放棄することも、センチメンタリズムに流されることもしない、あるいは出来ないだろう。

そうだとすれば、主人公が「犠牲者」の死を忘れ、回復するということは、彼女がゼーガースであることをやめることによってのみ、可能となる。この作品においてそのことは、主人公がネティ・ライリングに戻り、生きている少女たちと一緒に遠足に行くという形で実現する。ネティ・ライリングは、共産主義作家でもなければ生き残った者でもない、幸せな時代のドイツの一少女だからである。そして、そのことは、実は内なる願いとして以前からゼーガースの中にあっただけである。

学生時代以来、わたしをこの名前〔ネティ〕で呼んだ者はいなかった。味方や敵がわたしを呼んできた、あらゆる美名と悪名、何年もの間に道で、集会で、祭りで、夜の部屋で、警察の尋問で、本のタイトルで、新聞記事で、調書で、通過証で、わたしに添えられてきた名前を聞くことを、わたしは学んできた。病気になる、意識を失って寝ていた時、わたしはしばしば、その古い、子どものころの名前を望みさえした。しかし、その名前は失われたままだった。わたしはその名前について自己幻想の中で考えた。その名前はわたしをもう一度健康で若く、明るくすることが出来、失われてしまっただけ取りかえしのつかない古い仲間たちとの古い生活を用意することが出来るのだ、と。⁶

主人公が、失われてしまったネティという名を取り戻すということは、遠足という日、ネティとして生きた幸せな少女時代を代表する日を同時に取り戻すということである。ネティと呼ばれ、生きた級友たちと共に失われた幸福な生をもう一度「生き」直すことで、主人公はどんなに死が悲惨であったとしても、幸せな少女時代は確実に存在したということを確認する。幸せな少女時代は、彼女たちの死の「作られた記憶」とは違って、ネティ自身が体験したものであり、本来、主人公にとって何よりも確かであるはずのもの、確かでなければならないものである。しかし、その確かなものが、悲惨な死の記憶に圧倒されてこれまで忘れられてきた。死の記憶はあまりに圧倒的であるがゆえに、それを差し置いて幸せな生を思い出すという方法で、失われてしまった確かなものを取り戻すことは出来

⁶ Ebenda, S. 123.

Mit diesem Namen hatte mich seit der Schulzeit niemand mehr gerufen. Ich hatte gelernt, auf alle die guten und bösen Namen zu hören, mit denen mich Freunde und Feinde zu rufen pflegten, die Namen, die man mir in vielen Jahren in Straßen, Versammlungen, Festen, nächtlichen Zimmern, Polizeiverhören, Büchertiteln, Zeitungsberichten, Protokollen und Pässen beigelegt hatte. Ich hatte sogar, als ich krank und besinnungslos lag, manchmal auf jenen alten, frühen Namen gehofft, doch der Name blieb verloren, von dem ich in Selbsttäuschung glaubte, er könnte mich wieder gesund machen, jung, lustig, bereit zu dem alten Leben mit den alten Gefährten, das unwiederbringlich verloren war.

ない。主人公は、かつてネティとして体験した、ネティにとって何よりも確かな幸せな記憶を、もう一度ネティとして「生きる」ことで、初めて確認出来るのである。

主人公がその幸福な生を「生き」直す時、悲惨な犠牲者としてだけの、尊厳のない彼女たちは、遠のいていく。そして、級友たちの悲惨な死の「忘却」と、それと同時に起こる彼女たちの幸福な生の蘇りが、主人公を回復させる。病気からの回復は、「犠牲者」たちが犠牲になることによって受けた傷からの回復であり、回復した主人公が、共に「生きる」という形で思い出す「死んだ少女たち」は、もはやただ悲惨なだけ、ただ生々しいだけの「犠牲になった少女たち」ではない。主人公が彼女たちの「犠牲者」としての死を「忘れ」、生きている彼女たちと一緒に遠足を楽しむこと、遠足という時を「生きる」ことで、主人公の記憶の中の級友たちは、かつて共に喜びに満ちた生を送った「死者」、本来あるべき尊厳ある「死者」になることが出来るのである。

III 二つの現在

『死んだ少女たちの遠足』においては、「忘れる」ことも、生きている少女たちと共に「生き」直すことも、人間の力によってはなされない。たとえそのことをゼーガース自身が望んでいるとしても、それは、ゼーガースの心の奥底に封じ込められた願い、封じ込められていなければならない願いであり、ゼーガースの認識に上ることはない。あるいはゼーガースは、それを認識したとしても、自分がそう願っているとは認めず、もしもそのことを認めるとしても、ゼーガースの力では失われた時、失われた名前、失われた級友たちを蘇らせることは出来ないのである。苦痛を受けてなお「思い出す」という行為がひとえにゼーガースの意志と良心によってなされてきたのに対して、「忘れる」という行為、そして少女時代を「生きる」という行為は、ゼーガースの意志とは無関係に、あるいはゼーガースの意志に反して行われることなのである。では何が、ゼーガースに、悲惨な死を「思い出す」だけではない、それを「忘れ」、生きている少女たちと共に「生きる」という記憶のあり方を可能にしたのだろうか。次に引用するのは、この作品の結びである。

わたしは次の一步を踏み出すには、今は疲れすぎていて、さっきのテーブルについた。わたしは、少しだけ休んだら [わたしが泊まっている宿のある] 山に戻ろうと思った。わたしはわたし自身に問いかけた。どのようにして時を過ごすべきなのだろうか、今日と明日、こことあそこで。というのは、わたしは今、空気のように越えがたく、計り知れない時の流れを感じたからだ。わたしたちは小さい頃から、時間に恭しく服従するのではなく、何らかの方法で時間を克服することを習慣づけられてきた。突然、またわたしの頭に、学校の遠足についてきちんとした文章を書くよう、先生に言われていたということが思い浮かんだ。わたしは明日になったらすぐに、いや、今晚のう

ちにも、疲れが取れたらやらなくてはならない宿題をやると思った。⁷

ヨーロッパから遠く離れたメキシコで、失われた少女時代を一度生き直した主人公は、「どのようにして時を過ごすべきなのか？」と、自分自身に問いかける。1943年のメキシコに、「死んだ少女たち」と共に蘇ってきた戦前のドイツという時は、主人公が今まで体験し、向き合ってきた時間とは異質な時だった。それは、通常の時間の外にある、通常の時間から逸脱した時であり、それを主人公は、「空気のように越えがたく、計り知れない」と感じたのである。そのような時に対して、主人公はこれまでと同じ方法、服従するのではなく克服するという方法で向き合うことは出来なかった。だからここで、「どのようにして時を過ごすべきなのか？」ということが問題になるのである。

今までゼーガースが克服しようとしてきた時、克服してきた時は、通常、時間と呼ばれる時、つまり歴史である。歴史は、過去から現在を経て未来へと一方方向に流れて行き、留まることも元に戻ることもない。歴史においては、次々と現れる「現在」が、人間の生きるべき時間であり、かつて「現在」であったあらゆる出来事は、必ず過ぎ去って「過去」になる。そして、必ず過ぎ去る時間は、どんなに克服しがたいとしても、克服することが出来る。「克服する」とは、忘れがたい出来事を「忘れる」ことであり、思い出したくない出来事を「思い出す」ことであるが、それらのことは、その出来事が過ぎ去って二度と戻って来ない「過去」に属することを前提にしている。自分にとって「現在」であったこと、自分のまわりを押し包み自分にとってすべてであった「現在」を、たとえ「断ち切れない過去」という形であれ、逆に、「断ち切ってはならない過去」という形であれ、「過去」と呼べるようになる時には、既に「時の克服」は始まっているのである。レーニの死も、マリアンネの死も、非常に克服しがたい出来事ではあるが、それでもやはり「過去」であり、「忘れ」られるか、或いは意志の力で「思い出す」れ続けるか、いずれかの形で克服され得る出来事である。

だが、あらゆる時が克服され得る中で、克服出来ない、計り知れない時、歴史的責任において思い出すべきことに先んじて蘇り、それらを忘れさせてしまうほどに圧倒的な時が存在する。この作品において、ゼーガースがネティに戻って経験した「遠足に行った日」は、そのような時なのである。主人公は、「過去」としての遠足を「現在」という立場から

⁷ Ebenda. S.147

Ich war jetzt zu müde, nur noch einen Schritt zu machen, ich setzte mich vor meinen alten Tisch. Ich wollte in die Berge zurück, sobald ich ein wenig ausgeschnauft hatte. Ich fragte mich, wie ich die Zeit verbringen sollte, heute und morgen, hier und dort, denn ich spürte jetzt einen unermesslichen Strom von Zeit, unbezwingbar wie die Luft. Man hat uns nun einmal von klein auf angewöhnt, statt uns der Zeit demütig zu ergeben, sie auf irgendeine Weise zu bewältigen. Plötzlich fiel mir der Auftrag meiner Lehrerin wieder ein, den Schulausflug sorgfältig zu beschreiben. Ich wollte gleich morgen oder noch heute abend, wenn meine Müdigkeit vergangen war, die befohlene Aufgabe machen.

「思い出す」のではなく、「現在」としての遠足を「生きる」。遠足という時は、回想されているのではなく、蘇り、現前しているのである。そして、「過去」は蘇らないからこそ「過去」であり、人間の生きる時は常に「現在」であるとすれば、主人公の前に突然現れた、失われた少女時代は、「蘇った過去」なのではなく、「再びめぐってきた現在」なのである。この時は、長い間、「過去」として、しかも忘れ去られた「過去」として、主人公の生きてきた時間の彼方にあっただが、ここにおいて、時間の流れを超え、歴史から逸脱して、言わば「永遠の現在」になった。だからこそ、この時は、「責任を取る」「責任を問う」「思い出す」「忘れる」といった人間の主張や意図を超えて、主人公のもとに立ち返って来ることが出来たのである。

ゼーガースは、苦しみの中で密かに、「永遠の現在」が一瞬だけ戻ってくることを望んだ。故郷も友人も母親も失い、自分は交通事故に遭って、戦局の先行きもわからないという時に、「永遠の現在」は、ゼーガースが回復し、生きていくためにどうしても必要だったのである。だが、それは、歴史的時間の観点から見れば、「次の一步を踏み出すには疲れすぎている」時だからこそ許される、主人公が歴史に対する責任を放棄する瞬間であり、そのような時にしか許されないセンチメンタリズムである。そう願うことが、ユダヤ人の反ナチス作家としてのゼーガースの信条に反することである以上、「永遠の現在」は、あくまでゼーガースの意志と関係なく蘇らなくてはならない。ゼーガースの内なる願望として、しかしあくまでゼーガースの意志に反して「一瞬だけ戻って来てほしい時」は、同時に、戻って来たとしても「一瞬しか戻って来てはいけない時」なのである。

1943年のメキシコに蘇った「永遠の現在」は、ゼーガースが歴史に対しても死者に対しても責任を負う必要のない、幸せと喜びだけが確かなものとして続く時だった。ゼーガースは、ずっとこの中で生きていけば苦痛を受けることはなかった。そこには、死もファシズムも、交通事故も病氣も、ゼーガースの苦痛の原因となるようなものは何一つないのである。それにもかかわらず、ゼーガースは、「少しだけ休んだら、山に戻ろう」と思う。「永遠の現在」を振り捨てて山に戻るということは、作家としての日常生活に戻るということである。そこには、これまでと同じように戦争の続く、歴史という時間が流れており、そのような時間の中に戻れば、その時には再び、人間の力で時間を克服するという生活が始まる。作品を書くとは、そういうことである。

『死んだ少女たちの遠足』という作品は、「永遠の現在」を「生き」直したゼーガースによって、再び始まった「時間を克服する」生活の中で書かれたのであり、戦前のドイツという歴史的時間の中で「現在」としての遠足を生きた、その後の歴史を知らないネティが書いたであろう作文とは別のものである。その後の歴史を知らないネティは、これまでもこれからも続く、ごく当たり前の幸せな「現在」を確認する必要もなければ、回復する必要もなく、死者に対して責任を負ってもいない。そして、このネティが書いた作文は、このネティやフロイライン・ジッヒェルにとってよく出来た作文であったとしても、他の多

くの文章と同様、戦争を止めることは出来なかったのである。もちろんそれは、このネティには無理からぬことなのだが、もしもゼーガースが、「永遠の現在」の中で、このネティとして遠足について書けば、やはりこれと同じ作文しか書けないだろう。だからゼーガースは、遠足という時を「空気のように越えがたく、計り知れない」と感じながらも、自分の意志で、苦しみの続く日常生活に戻るのである。そこで書かれるのは、1943年という「現在」において、「過去」を変えられない悲しさを知った上で、「未来」を変えていこうとする作品、歴史に対する責任を負った作品である。ここにおいて再び、フロイライン・ジッヒェルの課題の意味が逆転する。今やそれは、「犠牲者」から生き残った者に出された歴史的課題というだけでも、平和な時代の中で、生きている教師から女学生に課された「学校の宿題」というだけでもない。主人公は、今は亡き教師が、かつてネティに課した「宿題」を、今度は作家アンナ・ゼーガースとして、歴史的責任において引き受け直す。それが、「どのようにして時を過ごすべきなのか？」という自分自身への問いかけに対して、主人公が出した答えなのである。

失われた時に蘇って欲しいという願いをかなえたのは、人間の力を超えた力、克服出来ない「永遠の現在」である。しかし、その体験を書きとめるためには、あるいはその決意をするためには、人間の力が必要なのである。この作品に書かれているのは、ゼーガースに一瞬だけ許された、「計り知れない時の流れ」との出会いであると同時に、ゼーガースの意志による、そのような時との訣別なのである。

この作品を発表した後、アンナ・ゼーガースは再び社会主義色の濃い作品を多く執筆し、1947年に帰国してからは社会主義国家の建国に尽力する。ゼーガースは、この後も、この前と同じように過去から現在を経て未来へと流れていく時間を、政治的な場において克服しようとして生きていくのである。ゼーガースが「計り知れない時」に圧倒されて歴史的責任を放棄し、級友たちとただ楽しく「生きた」時は、決して過ぎ去らない「永遠の現在」である一方で、これまでのゼーガースが生きてきた時間とも、これからのゼーガースが生きていく時間とも相反する時、おそらくはもう二度とめぐって来ない、瞬間的な時だった。「永遠の現在」は、そういうものとして、蘇ってくることを許されたのである。書くということは、そうしなければ幻のように消え去ってしまうであろうその時を、もう一度、今度は人間の力で、歴史的時間の中へと呼び戻し、確かなものとして記憶の中に留めるということである。そうすることで、「永遠の現在」は、ゼーガースの基本的な生とは異質な時、二度とめぐって来ない一回的で瞬間的な時、ゼーガース自身が自分の意志で訣別した時でありながら、ゼーガースが克服しがたい時を克服し、癒されがたい傷から回復して、歴史的時間を生きていくための支えとなることが出来るのである。

Sich Erinnern. Vergessen. Leben.

—Die Art und Weise des Gedächtnisses in „Der Ausflug der toten Mädchen“ von Anna Seghers

Teiko NAKAMARU

Anna Seghers schrieb "Der Ausflug der toten Mädchen" 1943 in Mexiko, wo sie im Exil lebte. Die Erzählung ist ihre einzige Selbstbiographie. Die Hauptperson ist Autorin im Exil in Mexiko und heißt eigentlich "Netty", so wie Seghers. Unvermittelt ändert die Umgebung der Hauptperson. Sie scheint nicht in Mexiko zu sein, sondern am Rhein, wo sie sich als eine Studentin vor dem ersten Weltkrieg auf einem Schulausflug mit ihrer Freundin findet, von denen viele während des zweiten Weltkriegs gestorben sind. In dieser Geschichte teilt die Hauptperson sich in zwei Persönlichkeiten. Die eine ist Anna Seghers, die 1943 lebt, um den Tod der Kameradinnen weiß und sich daran erinnert. Die andere ist Netty, die vor dem ersten Weltkrieg lebte und den Ausflug genießt. Eine Lehrerin weist Netty an, einen Aufsatz über den Schulausflug zu schreiben. Als die Hauptperson 1943 wieder zurückkommt, entschließt sie sich, über den Ausflug zu schreiben.

In diesem Artikel wird es um die verschiedenen Arten und Weisen des Gedächtnisses gehen.

Die Hauptperson will sich der Toten ihrer Freundinnen erinnern, so wie viele Überlebende im Nachkriegsdeutschland. Es ist das Einzige, was sie gegen die Nationalsozialisten tun können, die Minderheiten ausrotteten und deren Existenz aus dem Gedächtnis zu streichen wünschten.

Die Lehrerin der Hauptperson wies sie als Opfer des Holocausts an, sich zu erinnern und zu schreiben. Seghers ist eine Überlebende und soll ihre Aufgabe erfüllen. Seghers soll sich auch an den elenden Tod der Opfer und an ihr früheres glückliches Leben erinnern, das die Tatsache des elenden Todes unerträglich und unverzeihbar macht. Seghers soll sich an jeden Glücklichen immer mit dem Tod erinnern. Es ist schmerzhaft für sie. Aber sie soll den Schmerz ertragen und sich doch erinnern, weil Erinnern die Aufgabe für die überlebende Seghers ist.

Viele Hinterbliebene der Opfer wollten nach dem Holocaust nicht vergessen. Sie denken, dass die Opfer des Krieges keinen Augenblick vergessen werden sollten, weil ihr Tod am elendsten gewesen war. Aber wenn man sich an sie nur als die Opfer des Krieges erinnert, dann sind sie nicht menschenwürdige Tote, sondern Warnung vor Krieg oder Propaganda der pazifistischen Bewegung. Das ist quallvoll für die Hinterbliebenen und vielleicht auch für die Opfer selbst. Und die Art und Weise des Gedächtnisses an die Opfer des Krieges ist anders als an einen Toten, der nicht dem Krieg zum Opfer fiel. Man vergißt ihn im Laufe der Zeit und erinnert sich manchmal mit glücklichen Vorstellungen. Auch die Opfer des Krieges dürfen vergessen werden, so wie die andere Toten.

In „Der Ausflug der toten Mädchen“ ist Vergessen so wichtig wie Erinnern. Vor den Augen der Hauptperson steht nicht der Tod der Mädchen, sondern stehen die lebenden Mädchen vor dem ersten

Weltkrieg. Die Hauptperson vergißt den Tod der Mädchen und erinnert sich an ihres glückliche Leben.

Aber die Hauptperson als Seghers denkt, dass sie nicht vergessen soll, obwohl sie heimlich zu vergessen wünscht. Immer wenn die Hauptperson vergißt, ist sie nicht Seghers, sondern Netty, eine Studentin. Netty weiß nicht, wie die Zukunft ihrer Kameradinnen ist. Und sie denkt nicht, dass sie sich daran erinnern muss. Sie erinnert sich an die toten Mädchen nicht, sondern lebt mit ihnen.

Am Anfang dieses Stückes ist die Hauptperson als Seghers krank. Und nachdem sie als Netty mit den Mädchen gelebt hat, wird sie gesund und entschließt sich, über den Ausflug zu schreiben.

In diesem Stück gibt es zwei verschiedenartige Zeiten. Die eine ist die gegenwärtige Zeit und die andere ist die erzählte Zeit.

Die Hauptperson als Seghers ist in der gegenwärtigen Zeit, in der die Zeit unaufhaltsam von Vergangenheit über Gegenwart zur Zukunft fließt. In dieser Zeit erinnert sich Seghers an den Tod der Mädchen und wünscht sich heimlich zu vergessen.

Die Hauptperson als Netty dagegen lebt mit den Mädchen in der erzählten Zeit. Diese Zeit fließt auf Zukunft des Kriegs oder des Nationalsozialismus nicht. Wenn die Hauptperson in dieser Zeit ist, kann sie nur die Glücklichkeit des Ausflugs sehen und weiß nichts über den Tod der Mädchen. Aber in der erzählten Zeit kann sie nicht gegen den Nationalsozialismus kämpfen, wie in der gegenwärtigen Zeit.

Daher schreibt die Hauptperson als Seghers den Aufsatz über die toten Mädchen in der geschichtlichen Zeit, um das Unrecht des Nationalsozialismus zu bekämpfen, obwohl es schmerzhaft für sie ist. Sie ist nicht länger in der erzählten Zeit. Wenn sie in der geschichtlichen Zeit ist und über das Erlebnis in der erzählten Zeit schreibt, ruft sie die erzählte Zeit zurück, in der sie mit der Mitschülerin den Ausflug genoß, und prägt sich die erzählte Zeit als etwas Sicheres dem Gedächtnis der gegenwärtigen Zeit ein. Damit kann die erzählte Zeit der Autorin Anna Seghers helfen, sich von der schweren Wunde zu erholen und in der geschichtlichen Zeit zu leben.